編集後記

▼今井楠男さんの論考は、自身の思春期や二〇年前頃の思春期問題を振り返り、その相談事業における「父親の会」や思春期相談事業を紹介して、次につづく三人の父親の文のまえがき的役割を果たしています。

▼不登校問題は「引きこもり」に繋がることを阿部健一さんと石黒稔さんの報告は示しています。阿部さんの息子さんは、高校三年生から三〇歳の今日まで、石黒さんの息子さんも同じく高三から二四歳の今までひきこもりの状態です。石橋雅也さんは、高校三年生の娘さんと学校の関係を通して学校側の対応の重要さを改めて指摘しています。三者のいずれも希望が見えているのが幸いです。

▼時津聖子さんは、小学校一年生のわが子の具体的な様子を観察・分析して自閉症という概念を広げ深めています。筆者自身が読んだ文献のリストは参考になり得るでしょう。

▼星山ひろ子さんは、ダウン症のわが子とともに歩んだ二八年を報告して、障害者に対する教育や雇用の社会的条件の大切さを認識させてくれます。

▼障害を持つ子どもの父親・母親のように直接の当事者の論稿を載せられたことは情報の幅を広げ得た、と関係者に感謝します。

▼竹内光男さんの論考は、現場の教職員の視座から文科省の「今後の特別支援教育の在り方」を厳しく批判しています。その理念は評価するが、実態を批判するのか、明らかでないのが惜しまれます。

▼新田初美さんは、「今後の特別支援教育の在り方」の理念は評価して、「理念を実行に移し充実させるのはこれから」として、今やっている就学時健診の項目を改めて、軽度発達障害の子どもを早期に発見する、という提言をされています。

▼新潟県教委に特別支援教育の現段階を聞くは、軽度発達障害児とみなされる児童生徒が六%は在籍という前提を踏まえて、各種の施策を試行している現状が分かります。

▼今井照恵さんの養護学校設立運動の報告は、障害児・者の社会的条件の改善運動には保護者の力が極めて大きいことを知らせてくれます。

▼川辺朝子さんは、通常学級の担任の立場から軽度発達障害児の学校における問題の緊急性を訴えています。

▼亀山裕さんの「荒れた中学校から」は、"教師は何をしなければならないか"のシリーズとして数回の予定で続けます。その(1)ですでにその意義は明らかです。

▼俵義文さんの講演は、権力者側の教育政策がどこを向いて、どこまで来ているかを「心のノート」問題を柱にして解明します。教育基本法改悪反対のアピールと連関させてみてください。

▼首藤隆司さんの「燕市合併反対運動」は、各地で起きている合併問題の核心を示唆しています。

（藤田・吉田）

にいがたの教育情報 NO. 76

2004年1月10日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通1－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。